第６２号

執筆者@短信

田中　千晶

7月 18 日からの3日間、京都国際福祉センターにて家族療法講座を受講しました。興味をもったきっかけは大学院での集中講義。子どもを対象とした対人援助職を経験してから心理専門職を目指すにあたり、クライエント個人ではなくクライエントを取り巻く家族全体を包括して支援していく必要性、重要性を感じたことです。

講座では様々な年代、職種の方と合同チームで活動しました。初日はなかなか距離が縮まらずにメンバー全員がソワソワ、ドキドキしていましたが、対話やディスカッションを中心とした講義内容、グループワークやお昼休憩を通して仕事の話、暑さの話、それぞれの出身地の話などを話す中で、3日目にはボケてつっこんで、ワイワイ話すことができる仲になっていました。

大学院生活も2年目を迎え、同じ環境、同じ人間関係、同じことを学ぶ同期付き合いが続いていた中、さまざまなバックグラウンドをもつ人々と仲良くなれたことが講座の内容と同じくらい収穫でした。「次の研修もこのメンバーで受けよう！」と仲良くなった勢いで3日目の帰り道に STEP2 に申し込んだことも良い思い出です。

森で出会えば･･･
P301～

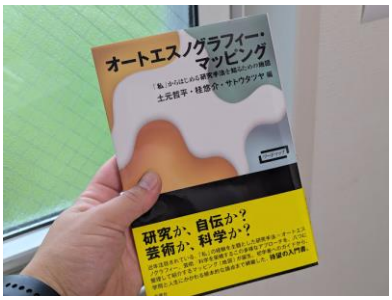
本林　友梨

毎日が一瞬で過ぎていく毎日を送っています。6 月頃に体調を崩し、仕事も一定期間お休みを頂くことになってしまい、身体もしんどかったですし、周囲に迷惑をおかけすることになって申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。今は 1 日、1 週間、1 か月と経つのが本当に早く感じられるぐらい充実した毎日ですが、いつも「あぁ、今日もあれできなかったな･･･」と悔やまれる日々でもあります。でも、こうやって過ごして行けることは当たり前ではないことだと思いますので、悔やんでばかりいないで日々感謝して過ごして行かなくてはいけないなと思います。

心理臨床における多重関係を考える
P297～

土元　哲平

予告していた通り、今回はページ数が圧倒的に少なくなりました（笑）詩を発想し、ことばを選び、考えるプロセスからは学んだことも多かったですし、意外と長い時間がかかりました。色々と伝えたい「作者の思い」はありますが、意味づけは読者の皆様にゆだねたいと思います。そして、ついに、『オートエスノグラフィー・マッピング』（土元・桂・サトウ編，新曜社）が刊行されました！！オートエスノグラフィーと出会ったのが修士課程のころ、2015 年です。10 年間このアプローチと付き合ってようやく出したいものが出せた、と思うと感慨深いです。



地球と宇宙の文化心理学
P303～

高名　祐美

「暑いですね～」が挨拶代わりの今日このごろ。梅雨らしい時期もなく、6 月から暑い日が続く。暑さに弱い私は、毎日半端ない汗をかき、一日の終りにはだっくりくる。毎日「熱中症警戒アラート」が出され、外に出ることが苦痛になる。そんな暑さの中、私の住む七尾市では地震で破損した道路の修復工事や家屋の解体が進んでいる。

能登半島地震から 1 年半。あちらこちらに空き地が目立ち、「ここは何があったところだろう」と思う場所が増えてきている。我が家も先日車庫を解体した。もう少ししたら、土蔵も近々公費解体する予定だ。隣の家も納屋を解体している。暑い中での作業。屋外で仕事をする人々に頭が下がる。自分には絶対にできない仕事だと心から思う。

スクールソーシャルワーカーの仕事
P234～

水野　スウ

暑い夏でした。って、まだ過去形じゃないけども。それでも一年前の夏よりはすこやかに過ごせてる気がします。我が家は涼しい、という思い込みがあって水分をしっかりとらなかった去年、家で熱中症になってしまった。夏をなめたらいかん、の猛反省から、うんと慎重に過ごした今年の夏です。

暑いと腸も元気なくなるので、今年は野菜をたくさん取れる、具沢山のデトックススープをしょっちゅう作りました。キャベツ多めにして、トマト、にんじん、セロリ、たまねぎ、あればピーマン、いずれも細かく切って、塩を鍋の底にパラパラ振ってから野菜を敷き詰め、その上に塩をパラパラふって、蓋して弱火でコトコトコト。水分が上がってきたら水を足し、さらにコトコトコト。味付けはコンソメの素か醤油で。一度作っておくと4、5回食べれます。味が薄くなったらトマトを追加してまたコトコトコト。おかげで腸の調子もいい感じ。食べたらしっかり出さないことには元気が出ないものね。

今年は参院選挙も暑かった、熱かった。一気に議席数を増やした党のことが気になって、私なりに思ったことを今号マガジンに書きました。締めのキーワードは、ぼろぼろの民主主義を繕う、です。ちくちくちくちく、と。

きもちは言葉をさがしている
P87～

馬渡　徳子

8 月、石川県全域に停滞型の線状降水帯が発生し、奥能登地域の一部にも三度目の甚大な被害をもたらした。

夏休みに N-ASCAT(能登半島地震子どもの放課後支援チーム)で継続的にお付き合いを重ねてきた認定こども園併設の学童保育所からは、幹線道路から生活圏につながる道路が複数個所寸断のため復旧見込みが立たず、訪問日延期の申し入れをいただき、鉄道が復旧する月末にリベンジとなった。

この夏休みを機に、ようやく入居可能となった仮設住宅に移り、新学期を迎える準備をしていた子育て世帯は故郷に帰れることをとても喜んでいたことから、胸が痛い。自然には抗えないが、お見舞いの言葉に詰まってしまった。

さて、8 月末に輪島高校の文化祭にて団士郎さんの漫画展を。9 月には珠洲市総合病院とわくわく広場にて漫画展とトークショーを行う。この一年半年のいしかわ家族面接を学ぶ会でつながった被災地の支援者仲間との共催企画だ。

次回の短信にて、ご報告させていただきたいと思う。

馬渡の眼
P 139～

乾　京子

毎日の猛暑に、もう、よれよれ。一日、庭の植物にお水をあげるのを忘れると、くた～とみじめな姿に自分を重ねる。ついつい、出かけるのも億劫になって、寝っ転がって本を読む。取りためたビデオを見る。何ともだらしない夏を過ごしている。今年の夏は、戦後80年。

昭和16年、私の父は、金沢で高校生活を送っていたところ、太平洋戦争勃発の為、繰り上げ卒業、航空技術部隊へと配属されて、飛行機の設計の仕事をしていた。昭和20年8月、「後一日、終戦が遅れていたら、南方に行っていて、お父ちゃんはこの世にいなかっただろうなァ」と、大尉の軍服を着て、祖父がかろうじてそろえた振り袖を着た母との結婚写真を眺めながら話してくれたことがあった。「戦後80年特集番組」は、とても見ごたえのある番組が多かった。一人ひとりにとっての戦争と、その後の80年と、今、現在進行形の戦争とその戦火の元にある子どもたち、（現在、この時が戦前だったんだなぁ）とならないようにしなければならない・・・いろんなことを考えている。そんな2025年の夏。

じゃりんこ文庫
P 294～

中谷　陽輔

今回でようやく連載10回目です。休載した号（第59&60号）もありましたが、なんとか二桁に到達しました。前回の著者短信で述べたように、父の介護・逝去というやんごとなき事情があったとはいえ、休載がなければ第60号でちょうど10回目とわかりやすかったりしたのに、と思う野暮ったい自分は、そっと神棚にしまっておきます。

ところで、万博があと 1 か月ほどで終了しますね。実は父が定年まで勤めあげた企業のパビリオンが開催されており、抽選も運よく当たったので家族で万博に馳せ参じていました。父も 55 年前の万博に行ったと聞いていたので、二世代での万博参加となりました。

偶然にも、前回の対人援助マガジン（61号）が発刊された、2025 年 6 月 15 日に行ってきました。さらに縁深いことに、いわゆる「父の日」でもあり、父の満中陰（四十九日）の法要を終えた翌日でもありました。

・・・抽選に当たったのも、仏に成った父があの世で、ちょいとばかし細工をしてくれたんだと、割と本気で思っています。というのも、いくらその日に万博にいく予定をして、抽選を狙った自分はいたにせよ、「父が成仏した翌日の 6/15 父の日に、父にとっても縁深い万博に、父が勤め上げた会社のパビリオンに当選し、父として参加する」って、なんだかできすぎていませんかね。

そりゃぁもう、万博会場中のあちらこちらにいるミャクミャクを眺めながら、脈々とした繋がりを感じざるを得ない・・・ってなもんです。

万博開催中に、もう 1 回は家族で、亡き父との繋がりを感じにいこうと思います。合掌。

コソダテノシンリ
P263～

山岸　若菜

前回の短信で夫が仕事を辞めたことを書きました。

3 ヶ月経ち、失業保険を受け取れるようになり、ますます家事力に磨きがかかっています。

それでも健康保険、年金、市税に府税と、容赦なく送られてくる送付書にビビり、ようやく自分の店を出すという目的に向けて動き出しました。

新しいことを始めるのは不安もあるけど楽しいですね。

横で口を出してるだけなのでそんな悠長なことを言っていられるだけかもしれませんが・・

とにかく頑張ってほしいと思います。

ある訪問看護師のあたまの中
P 285～

内田　一樹

今年は戦後 80 年となる年です。様々な場所で戦後 80 年に関係する企画展や催

しがされています。本来、平和は戦後 80 年だろうが、79 年目だろうが、81 年目だろうが大切です。しかし節目というものがもつ力もやはりあるのかもしれないと思います。「節目」が後押しをして、語り始められる人がいる、「節目」が後押しをして、聴き始められる人がいる…。震災も同じです。10 年という節目が持つ力は確かにあったけれど、しかし 11 年目も 12 年目も大事だと思うからこそ授業を始めました。災害と戦争、そして平和は全てつながっています。高校生が震災学習や宮城県石巻市・福島県浜通りスタディツアーを通して得る学び（講座名「東北と復興」）が、どのように対人援助学への発展の可能性を持つのかをようやく言語化することができるようになってたと思っています。これから数回に分けて書いていきます。大学での教育や対人援助職者の皆様からのご意見をいただけると嬉しいです。

社会科の授業を対人援助学の視点から
P278～

宮井　研治

一応、わたくし現役の大学の先生です。大学教授に一番似つかわしくないと自負しながら、授業ではそんなマイナスな自負はせず、教鞭などを取っておりますると、たまに学生くんから質問を受けたりします。大箱の授業後、一人の女子学生がつっーと、私のところまで来るではありませんか。“あれ、授業でおかしなこと言っちゃったかな？”、このあたりが教授としての自信のなさの表れでしょうか、あるいは謙虚さか！その女子学生は質問のためでした。女子学生がなぜその質問を発したのかは、ホントのところよくわからなかったのですが、質問の内容はこうでした。「先生、児童相談所って、子どもを勝手に連れて行って、トラブルになってるってネットなんかで出てますが、（自分にとっても今後）こわいなーって思うんですが、どうなんでしょう？」こんなんでした。私がショックだったのは、子どもを勝手にさらっていく事実があるということをその女学生は、前提としてしゃべっていたということです。私が授業で児童相談所について説明していたわけですから、「話聞いとったんか～い！」とツッコミを入れたくなるところですが、SNS の力は恐るべしという気持ちも起こりました。意に添わぬ一時保護をされた親御さんからの発信だけを聞いていたらそういうストーリーもできるかなと思った次第です。質問してくれてありがとうですね。

加えて、児童相談所が月 9 の舞台に取り上げられるというのも、時代なのか、他にないのか？いずれにしても児相OBとしてはうまい方に作用してくれたらと願ったりします。

人生は対応のヴァリエーション
P288～

櫻井　育子

夏になるとなんとなく寂しさ、侘しさ、命について考える機会が増えるのはとても当たり前で、広島、長崎、終戦の日があり、お盆があり、短い命の蝉がひたすら鳴き続ける日本という国にいて、これっぽっちも心が動かないなんていうことがあろうか、と思う。繊細で傷つきやすい子どもだったわたしは、大人になってもそれはそのままで、学生のときに信頼していた大人に、「夏は悲しい気持ちになることが多い」というような話をしたら、正確にはなんて言われたか覚えていないが、その回答でさらに傷ついたことが思い出される。平べったい言葉で言えば、「感傷に浸るな」的な発言だったと思う。小さなことだけれど、わたしはそれ以来、その人には感情を話さなくなった。

大人になりかける時期に、わたしは大人に対して理想と幻滅を感じ、ひどい言葉で言えば「生きるために」大人を見下して生きてきたことすらある、と思う。そんなわたしが感情を解放していいと思えるようになり、複雑に見える家族について肯定し、堂々と今に至るようになったのは、やはりこうしてたくさんの「大人」に出会えたからでもある。あらためて、ここでの出会いに感謝の気持ちでいっぱいになった夏だった。

生涯発達支援塾 TANE 代表
shukou0122@gmail.com
https://ikuko-sakurai.com

わたしはここにいる
P260～

鳴海　明敏

備忘録～理事長の独り言～

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に脳梗塞になりましたが、2週間の入院・リハビリの後無事に職場復帰することが出来ました。主治医は、本当に幸運な人だと驚いていました。この幸運は、「まだまだ園長を続けろ！」ということかと思いましたが、しばらく時間が経過したら、元気なうちに園長職を次に引き継ぐために与えられた幸運だ、と思うようになり、2025年令和7年3月で園長職を退き、後任にバトンを託しました。現在は、法人の理事長として、週に3日学園に顔を出すという生活をしています。

そんな生活をしながら、思い出したことや気が付いたこと、整理しておきたいことなどのあれやこれやについて、思いつくままに書き残していこうかと思います。学園のこどもたちと触れ合う機会もあるので、こどもたちのことを紹介することもあるかと思いますが、こどもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

理事長として、週三日5時間ずつ出勤する生活も5か月目になりました。「三日出かけて四日在宅」というペースに少しずつ慣れてきたかなあというところです。大変なのは四日連続の在宅の方で、奥さんの生活ペースとの折り合いをつけることに苦戦しています。炊事や洗濯などの家事にも参加したいのですが、なかなか奥さんのお許しが出ません。今のところなんとか役割を果たせているのは、メモを持ちながらの買い出しです。

新しい生活に慣れてくるにつれて、それまでの週40時間フルタイムの勤務はやっぱり高齢の身にはハードだったんだなあと

いうことが、少しずつ理解できるようになってきました。今の生活で嬉しいのは、関心のある事柄への関りが、「仕事」で中断させられることがないということです。今関心のあるのは、日本に「カウンセリング」を紹介した友田不二男氏です。参加したワークショップや講演などの資料を、楽しみながら掘っくり返しています。

理事長の独り言
P258～

高木　久美子

飼い猫のアレサが死にました。
アレサは 2011 年に地域猫の TNR 活動をしている人から譲り受けました。ピンクがかったグレイの柔らかい毛色の大層な美人さんでした。そしてすごく頭が良くてしっかり者でした。我が家の洗濯機は乾燥機は付いておらず、すすぎ・脱水までで完了。止まったことに気が付かないでいると、ニャーと鳴いて洗濯機のところまで私をいざない教えてくれたことがありました。
またアレサに続いて数か月後に緊急保護した茶トラのペコが、すりガラスの重い扉が開いていた部屋に知らぬ間に入ってしまい、中にいることに気が付かず私が戸を閉めて閉じ込めてしまった時も、アレサが教えに来てくれて、ついて行ってみると、すりガラスの向こうで出られずウロウロしているペコの影を発見ということもありました。具体的なお助けのエピソードだけでなく、なんとなくいつも見てくれているような、そして相槌上手。こちらの話しかけが途切れるタイミングで、にゃ、にゃと絶妙の合いの手。猫ですが、私はアレサをかなり頼りにしていました。
うちに譲渡してくれた猫のボランティアさんが公園で最初にアレサを見かけた時は子猫を連れていたそうで、保護された時は2、3歳にはなっていたのではと。その後 2 度ほどトライアルがあったものの先住猫との折り合いが悪く戻されたりして、保護主さんのところに数年。そしてうちに来てくれてから 14 年だったので、しっかりおばあさん猫になっていて大往生だったと思います。
最期の半月ぐらいはほとんど動けなくて、夜は私と枕を半分こして眠りました。
最後まで美人さんでした。
死んで数日はトンと小さな物音がしたり、気配を感じたりしました。今はしません。
ありがとうアレちゃん。とても大切な存在。

ヨミトリとヨミトリ君で
ご一緒しましょ！
P252～

畑中　美穂

プールで泳ぐのが好きだ。子どもの頃は水泳の授業が嫌いで、苦痛でたまらなかった。唯一楽しかったのは、授業の最後に全員がプールの端に寄って輪になり、同じ方向に回って大きな渦を作る、通称「洗濯機」という遊びだった。泳ぐことが楽しいと思うようになったのは大人になってからのこと。最近もふらっと出かけては、“何泳ぎ”というのか名は付け難い泳ぎ方で水のなかを漂っている。”水のなかの生き物になる練習“、みたいな感じ。
　先日もそのようにしていて、夕方、陽の光が水底にゆらゆらと模様を描いているのを見た時にふと、子どものころにした碁石拾いを思い出した。碁石といってもきれいな半透明の色ガラスのようなものだったと思う。潜って手で取るのだが、足の指でつまんで拾ってもよかった。長い時を経て、記憶のなかからの思いがけない“贈りもの”。ちゃんと、みつけられた。「よかったなぁ、みほちゃん。泳ぐのが好きになって」

一語一絵
P273～

山下　桂永子

　先日車を買い替えました。先代車とはこの 19 年半、たぶん家族よりも一緒の時間を過ごしました。最後の1か月ほどの間にエアコンは壊れるわエンジンは壊れるわで、もうわが身の最期を悟ったかのような走りに怯えつつも愛おしく、たくさん写真を撮って涙のお別れをしました。総走行距離 33 万 6 千キロでした。ありがとうミドジーノ（緑のミラジーノなのでそう呼んでいました）。
　というわけで、新しい子（車）をお迎えしたのですが、鍵はささなくていいし、サイドブレーキはおろかフットブレーキすらないんです。新しい機能が多すぎて空でも飛ぶんか？って思っています。内容とは関係ないのですが、読んで頂ければ幸いです。

心理コーディネーターに
なるために
P151～

渡辺　修宏

「今回は、友人である高山かおり先生にご執筆頂いた。文面にある通り、彼女は 2 児の母なわけだが、

彼女の初めて出会った頃（当時、彼女は大学生）のイメージがまだまだ鮮明であるため、どうもピント来ない。

とはいいつつも、よくよく考えたら私もいつの間にか中年・壮年であり、髪形にいたっては立派な翁なわけだから時の流れを認めざるを得ない。まさに長い友…。

対人援助実践をリブートする
この一冊
P 240～

米津　達也

二人の子どもが実家を卒業し、残されたのは夫婦二人と犬と亀がそれぞれ一匹。十年を経過した家電製品が次々と調子を崩している。これまで家族の生活を十数年、よく支えてくれた。しかし、子どもの引っ越し準備等で随分お金も掛かった。当面は機械を休ませ、食洗器の代わりにゴシゴシ食器を手洗いする日々です。

川下の風景
P 230～

玉村　文

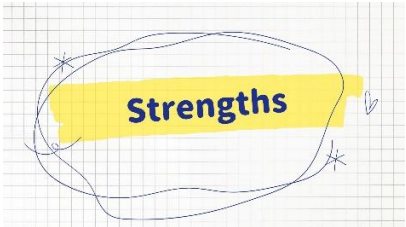
今年の夏は、夫の実家・北海道へ一週間ほど帰省してきました。
子ども 3 人を連れて飛行機に乗るだけで、すでにひと仕事終えた気分です。

「今年の北海道は暑いらしい」とニュースで見て、出発前から少々げんなり…。
ところが行ってみると、京都より 10 度近く低い日もあり、外で遊べるくらいの“ちょうどいい暑さ”。
…とはいえ、エアコンはしっかり稼働させていましたが。

そんな中、早朝に外へ出た息子が一言。
「あ、冬だ」
確かに夜や朝は寒いくらいの気候で、子どもならではの素直な感想に笑ってしまいました。

公園遊びに虫取り、野菜の収穫――夏休みらしいことを思い切り楽しめた子どもたちは大満足。
一方で、未就学児 3 人を連れての大移動はなかなか大変で、「次は母子旅も…」なんて密かな野望も芽生えました。

ただ、京都に戻ってきた途端、気温差にやられたのか子どもたちが次々に体調不良に…。
おかげで我が家の夏休みは、思わぬ延長戦に突入することになりました。



応援　母ちゃん！
P220～

川畑　隆

孫を連れて家族 4 人で長崎に行ってきました。稲佐山のホテルと近くのレストランから長崎港の夜景を眺め、翌日はレンタカーで平戸まで。佐世保のハウステンボスには午後 3 時から入場して夜のショーと花火まで満喫。次の日は定番の大浦天主堂とグラバーガーデン、そして出島と新地中華街。夕方にはホテル近くの屋内プールと大浴場へ。最終日は諫早のじゃぶじゃぶ池に足を浸けながら木陰で 4 日間の仕上げの休息。
ホテルの 3 回の朝食ブュッフェでお腹は満ち満ちて、ほとんど昼食抜きの毎日。平戸が遠すぎたこともあって九十九島を間近から眺める時間がなく、それが少し心残り。小 4 の孫娘は 12 歳のキリシタンが処刑された事実を大浦天主堂で知り、
それが強く胸に響いたみたいでした。
京都より温度は少し低めなものの、やはり暑さは半端じゃなかったけど、行きたいところがいっぱいの観光都市、長崎。オランダやポルトガルとの歴史を強く思い浮かべた 4 日間でした。

私の頭の中のまだエンピツ
P215～

杉江　太朗

家庭福祉領域で働く杉江と言います。今年度、私の属する組織では、全国規模の大きなイベントを催すことが決まっています。私の職場に面する道路でも工事が続いており、今までは1車線ずつの普通の道だったのが、どうやら2車線ずつの計4車線の道になるようです。私の職場に面する道を進むと、少し前に新しく出来たピカピカの体育館があります。その体育館に来館する人たちへの見栄でしょうか、それとも皇族でも通るのでしょうか、歩道まで整備されてピカピカになっています。そもそも2車線ずつ作ったとしても、イベントが終わればそれだけの交通量は到底ないでしょう。そんな、見栄と無駄を前面に押し出した工事が各地で行われており、組織の力の入れようを感じています。同じ組織が管理する我が社ですが、夏場には、クーラーからは水漏れがし、1年を通してトイレは詰まる始末。そういえば門も壊れて開閉できなくなっています。相談援助を行う場として、悲しい限りですね。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P204～

浅田　英輔

メガネを新調した。だいぶ見えにくい気がするなーと思って眼鏡屋さんにいったのだが、「よくこれで免許更新通りましたね！」と驚かれた。だいぶ視力が下がっていたらしい。ついでに、遠近両用にすることにした。ついに。でも、メガネかけてる人はわかると思うのだけど、見えにくいときって顎を出すような姿勢で、レンズを傾けると少し見えるようになることがあるよね？それができなくなったのがどうも慣れない。一緒に作った度付きサングラスは、ピンクのやつにした。かわいいのだ。

臨床のきれはし
P108～

三浦　恵子

「高齢者」について、統一的な定義は実はありません。世界保健機関の定義では、65 歳以上の人のことを高齢者としていますが、法令や行政により年齢を定められています。そのため、労働法令や社会保険関係については留意が必要であり、私も注意を払って対応してきました。しかし私自身にとっては、高齢者の諸制度はまだまだ他人事という意識がありました。
ところが昨今、自分自身が「高齢者」の枠に入るとは思ってもみなかったという出来事がありました。
今年5月末に帯状疱疹を再発しました。痛みその他が酷く、折悪しく発表を行う予定であった某学会は、遠方の会場への移動が困難であるため欠席するという為体でした。
周囲からはお見舞いの言葉とともに、「帯状疱疹ヘルペスワクチンの接種を受けておけばよかったのにね」とも声掛けをいただきました。実はこの直前にもワクチン接種に関するポスターを眼にしていました。ただ、当時のポスターの文言やイラストが「高齢者の方向け」であったため、「私はまだその対象ではない」と思い込んでしまっていました。
実はワクチン接種に関しては「50 歳以上」の方に接種が勧められていたのでした。
「50 歳で高齢者？いやいやサザエさんの時代か！」（子どもも孫もいる波平さんはマスオさんと同じ会社に勤務しており、50 代という設定と思われます）と憤ってみたり、自分が高齢者のくくりにハマっていることに愕然としたりで、今回の帯状疱疹ヘルペス再発は、身体の痛み以上に魂の痛みとなったのでした。
皆さん御自愛くださいませ。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P195～

迫　共

7 月に国際学会でタイに行ってきました。医療系の学会で、AYA 世代の難病患者を対象とした妊娠前カウンセリングの体制づくりについて提言しました。

仕事のかたわらでアユタヤの仏教遺跡を見たり、グルメを楽しむこともできて、コロナ後久しぶりの海外滞在となりました。

タイ人は関西ノリに近く、「まぁええやん」と柔軟に多様なものを取り込み、貪欲に発展している様子。反面で、日本の経済的後退を強く感じました。

日本では暑さのせいか排外主義が盛り上がる、異様な参議院選挙が行われましたが、本当に外国人がいなくなったら、経済力の低下はさらに酷くなると思います。

戦後 80 年。今ほど多様性や寛容さが求められる時代はないかもしれません。

なお、タイの方がまだ涼しかったです。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P201～

黒田　長宏

YouTube番組。『マーサとクッピのチャレンジトーク』の、男性のほうは私です。

Google検索でもYouTubeからの検索でも出てきます。よろしくお願いします。

あぁ結婚
P169～

松村　奈奈子

ふらっと時々、自分の専門分野ではないけど精神科に関わる学会に参加してみる事にしています。初夏に緩和ケア関連の学会に行ってきました。なるほど一、そんな感じなのか一勉強になるなーと講演を聞いていたのですが、一番印象に残ったのは、オランダでは安楽死が全死者数の約 5%を占めるという話でした。世界で1番安楽死が進んだ国では、20人に1人が安楽死で亡くなるのか!!と驚きました。オランダは2001年に法律で安楽死について定められ、安楽死の数は毎年増えています。そして、世界全体でも安楽死の数は増え続けています。

私は個人的にオランダの文化や考え方が好きで、何度も訪れたことがあります。安楽死の動向も時々チェックしていたのですが、ここまで増えているとは思いませんでした。

うーん、日本で安楽死を定める法律ができる日がくるのか？こないのか？いろいろ考えてしまいました。

神科医の思うこと

P136～

村本　邦子

相変わらず、落ち着きなく駆け巡っている。抱えている仕事もいろいろあるので、出張先でもコツコツやっていて、年を取って記憶力が怪しくなってきたのに対し、同時並行的に仕事をする能力は格段にアップしたと自負していたが、ついにボロが出てきた。飛行機の予約をしたつもりが、支払いをしていなかったようでできていなかった。これは容量オーバーだなと反省している。還暦過ぎて、いつまで元気に動けるかと考えた時、つい動ける時に動いておこうと思ってしまうのだ。すでに年内ほぼ予定が埋まってしまっているが、来年度は用心しよう。

周辺からの記憶
―東日本大震災家族応援プロジェクト―
P124～

國友　万裕

不二出版からメンズセンターが出していたミニコミ誌『メンズネット』の復刻版が出ます。

メンズセンターはとっくに閉鎖されてしまいましたが、大阪の天満にかつて存在した小さな雑居ビルの一角、メンズリブ団体の発祥の地です。僕がここに出入りしていたのは 35 歳から 36 歳にかけてだから、今から 25、26 年前でした。

ここは中村正さんや伊藤公雄さんも含めて男性学の草分け的な人たちが集うところでした。僕はここで、『男性雑誌とジェンダー』というプロジェクトに関わり、2 年間くらいべったり出入りしたのですが、その後、大きな確執が起きて、ここから破門にされることになりました。と言っても、それはメンバーの 1 人が僕を嫌っていたからに過ぎないのですが、依頼されて書いた原稿が出なかったりで、大変なトラブルでした。

しかし、その幻の原稿がついに出るのです。と言っても、復刻本なので、一巻が何万円もします。一巻目はこの 9 月に出る予定ですが、僕が書いているのは二巻か三巻になりそうな気配なので、まだ日の目を見るのには時間がかかりそうですが、これで長年に渡るわだかまりが溶けることになるのかも知れません。

あの当時のメンズリブのメンバーは、今はもう 70 代くらい。若い人でも 60 歳近くになっています。もうみんなおじいちゃんです。

月日の経つのは早い。感慨無量です。

スポーツおじいさんになりたい！
P96～

竹中　尚文

対人援助学会の研究会にゲスト講師としてお話をさせていただくご縁をいただいた。私は普通の坊さんで、見識や知識を持った方々に何を話すのか、心細かった。教わることも多いと思って、お話しさせていただいた。聞いてくださった方から、とても優しい気持ちが伝わってきた。Zoom なのに不思議な感じだった。◆話の中で、私は「路上生活者」と呼ばずに「ホームレス」と呼んでいた。このマガジンのタイトルは「路上生活者の個人史」である。この連載を始めたのは、2020 年からだった。その頃、私は「路上生活者」という言葉を使っていた。コロナ禍が始まった頃で、ずいぶんと公園やバス停で眠る人がいた。今、屋根の下

で眠る人が増えた。しかし、屋根があるからといって、それぞれの問題が解決したのではない。喘ぐようにして生きている人たちが私たちお支援の前に並ぶ。人は支え合って生きている。その濃密な関係が家族である。家族を持たない人たちが生きるのは苦しい。私に特に援助ができるわけではない。何もできていないようにも思う。食べ物を渡して、挨拶をして、顔を覚えて、名前を覚えようとするだけである。たまに、チョット生活を尋ねたり、人生を尋ねたりしている。◆食べ物は姫路にあるお寺でボランティアの人たちが作ってくれる。調理ボランティアは多くいるが、配布をしてくれるボランティアの人たちが少なくで困っている。ほとんどが勤め人であるので、勤務が終わってから駆けつけてくれる。男性だけでなく女性ボランティアが参加してくれるのも助かっている。ホームレスの方の中には女性もいるので、話しやすい。冬に粕汁が食べたいと言われて、粕汁を作って配った。「ほんとうにおいしい」といってもらった。以来、何かご馳走を作ってくるのが定番になった。◆繰り返しになるが、配布ボランティアが不足している。たまにでいいから「手伝いに来たよ」と声をかけてくれると、嬉しい。私たちは毎月第 4 火曜日に支援活動をしている。今月は第 4 火曜日が彼岸の中日なので、支援日は 9 月 30 日(火)になる。時間は 18 時 30 分ごろより準備をはじめて、19 時 30 分から支援活動を開始する。20 時 30 分ごろに撤収する。終了後、時間の許す人たちで簡単な食事をしている。初めから最後までの時間でなくてもいいので、覗いてほしい。場所は大阪市北区にある扇町公園である。天気によって、公園内の場所が変わるので注意してほしい。

路上生活者の個人史
P94～

坂口　伊都

里子と離れて暮らすことになってから6年。それまで里子との交流は、どこかに出かけることで続けてきました。離れることになった日は正直、思い出したくありません。そして今まで誰も「家に行こう」と言い出さなかった私たちがいて、暗黙のルールのようになっていました。よくわからないけど、家に集うことを恐れていました。

里子も成人をして、己の暮らしを働いて成り立たせて、自信が芽生えてきたように見えてきて、我が家にある様々なモノが里子を刺激しないのかなと思い始めていました。その時、家で待ち合わせしたら上手く回る出来事があり、思い切って里子に「家に来る？晩御飯食べていく？」と誘うと「うん」と即答してくれました。「駅まで迎えに来て」と不安気にしていましたが、我が家に里子が帰ってくるとすぐに懐かしい雰囲気に包まれました。やっと帰ってきたねと家が言っているようです。今年のお盆は里子、息子、娘が次々と訪れて賑やかでした。猫は、「また違うの来た」と迷惑そうにしていましたけど(笑)

療育手帳の向こう側
P119～

河岸　由里子

年齢には勝てない。やはり年のせいと思えることが増えた。先ず同時処理がへたくそになって来た。記憶力が落ちた、忘れ物が増えた、漢字が出てこない、人の名前や物の名前が出てこない。身体的にはそこまで衰えていないが、脳は確実に衰えている。脳トレのつもりで中学の数学を解いてみたり、ナンプレをやってみたり、イチョウ葉エキスが良いと聞けば飲んでみたり(騙されているとは思うが)、ピアノを弾いてみたり、オーディブルを聴いたり、あれこれ試す。先日母方のいとこ会があった。母親は三姉妹で三人ともボケて亡くなった。遺伝要素があるということだ。いとこの一人が脳神経外科医で、ボケを心配して脳ドックを定期的に受けているという。私も二年に一度くらい受けている。結果はどちらも年齢相応の委縮。年齢相応の委縮って良いのか悪いのか？？わかりづらいじゃないか！ピンピンコロリという言葉がはやった時期があった。やはり何とかボケないで最後を迎えたい。そのためにできることはやる、一日一日を楽しむ、これっきゃない！

公認心理師・臨床心理士・北海道
かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

ああ、相談業務
P 73～
先人の知恵から
P 159～

大谷　多加志

4 年前から我が家で暮らしている元保護猫が今年で推定 9 歳になりました。ネットで調べた情報では、人間に換算すると 50 歳過ぎにあたるとのことで、そろそろ初老の域に入りつつあります。老いもあるのか、今年になってから出てきた変化として、やたらベタベタと甘えるようになったのと、吐き戻しの頻度が増えたのと、ちょっと困るのが旅行の間留守番してもらうとソファなどで失禁するようになったことがあります。失禁は、今年 3 月の台湾旅行の後にやられたのが最初で、今月の旅行は 1 泊だったので何とかいけるかと思ったのですが、結果しっかりとやられていました。万一に備え、ペット用のソファカバーをかけ、間にペットシートを挟んでことが幸いし、ソファの中綿はかろうじて救われていましたが、帰宅早々ソファカバーを全洗いするハメになりました。当たり前のことながら、年を重ねるってこういうことも含まれるよね…と思いつつ、またマガジン執筆＆編集の時期を迎えました。

発達検査と対人援助学
P 110～

鶴谷　主一

「今日は猛暑です、熱中症対策のため外出は控えて･･･」とテレビやラジオで繰り返しアナウンスされると、それでなくても部屋から出たくないのに、それが良しとされたような気持ちになってしまいます。
ところが、心身を現在進行形で発達させている子どもたちにとって、部屋の中に籠もることは望ましいことではありません。あそぶもの、あそぶ方法が乏しいと、勢いテレビやデバイスのスクリーンタイムは伸びて

いくでしょう。猛暑の与える悪影響とジレンマはコロナ禍の時と同じように感じます。

救いは、猛暑にめげずに夏休みにあちこち出かけていってあそんでくれた家庭も結構あるということが「夏休みの記録の報告」でわかりました。
そして子どもたちは、ぐーんと発達して2学期の園に戻ってきてくれました･･･ちょっと安心。子育て中の親御さんたちも良く考えてがんばっているんです。園も環境を整えて応援しなければ、と思います。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P 59～

中村　正

テニスひじ･ゴルフひじのような痛み（といってもやったことがないので分からない）があり、近くの整骨院に通う。スポーツリハビリ･整体がメインのようなところだ。保険でリハビリなので賑やかだ。スポーツリハをメインにしているので患者が若い。中学生、高校生、大学生で体育会部員らしい男子が多い。整体師に女性が少ないからかもしれない。スタッフも若い。夏なのでみんな真っ黒に日焼けしている。実に健康的だ。聞こえてくる会話も意味の分からない内容が多い。スポーツの話題であることは確かだ。長く通っているのか名前で呼び合っている。そう男子部活のノリなのだ。さながら「おう！タダシ！」という感じ。高齢者は少なく、すごい違和感！丁寧に苗字で呼ばれるのでよけいによそ者感がある。だから高齢者感が際立つ。だからだろうか、患者もスタッフもみなさんやけに優しい。待合室でも若者は席を譲ってくれて怪我しているのに立って待つというかジベタリアンだ。やはり全体として男臭い。健康よりも勝負の勝ち負けにこだわる身体づくりなのだ。つまり、マッチョなリハビリ！だ。こうしたなかではこちらの男性性も賦活される。治そうという意識に駆り立てられる。克己、頑張れ、勝利、レギュラー獲得と壁に貼ってある。部活していたのはもう半世紀も前になるが身体が記憶しているのだろう。当時の部室の匂いまで思い出す。マガジンに連載している論調からすると健康的な男性性ジェンダー？となろうか。不思議な体験5日目だが、でもまだ痛い。

臨床社会学の方法
P21～

団　士郎

新連載を考えた。しかし既に二年以上連載中の「晩年 DAN 通信」がある。誰が読んでいるかは分からないが、その愛読者への仁義もある（･･･かどうかは分からないが）。

そこでしばらく前に試して中止した、付録連載のようにしてみた。DAN通信の付録である。内容は五月に出した新刊「家族理解の教科書/graphics」の続きである。

今秋11月には家族理解自主勉強会用 DVD の第四弾を収録予定である。全国のあちこちで、自主的に小さな家族理解勉強会をして貰える素材として毎年一枚制作してきた。いろんなところでかなりな回数、活用していただいているようだ。

何事によらず、継続できる仕組みをこの世界に置いていくのが今の私の使命だと思って、楽しくやっている。

晩年Ｄ・Ａ・Ｎ通信
&
付録『木陰の物語』を
家族の構造理論で詳説する❶
P 35～

中島　弘美

この秋、開催される第 17 回対人援助学会大阪大会の現地運営に関わらせていただいています。初日 10 月 11 日(土)最終枠の時間に「対人援助学マガジンの執筆者と読者の交流会」を現在、企画中です。日頃、読んでいるあのマガジン執筆者と直接お会いすることができる機会です！当日は、「ライブ版執筆者短信」ができるよう準備をすすめています。ぜひ、大阪大会にお越しください。そして交流会へのご参加もお待ちしています！

カウンセリングのお作法
P 32～

篠原　ユキオ

夢は正夢？
車を運転していて細い道に入り込んだ。横道にそれようとしたら建物の外壁にフロントバンパーをこすってしまい不注意を悔やみながらバックして車から降りた。
ところが傷を確めて後ろを見るとすぐそこに2台の外車が止まっており、その1台に自分の車の後部が当たって大きく凹んでいた。持ち主と思われる一人の外国人が近づいて来るのを見て焦りながら「これは夢に違いない！」思い、反射的に思いっきり目を開けようとしたら瞬時に目が覚めた。
たいていが夢の中から抜け出せないで、暫くはもがく時間があるものだがこんな事は初めてだった。
翌日、それを思い出しながら車を走らせていると対向車とすれ違いざまにドアミラーが接触して根元から破損してしまうという事故になった。
またか！と思いながら「これも夢だったりして…」とまた目を大きく開いたがこの時は何も変わらず、ちぎれてしまったドアミラーを片手に某然としている自分がいた。
「昨夜の夢はこれを知らせる予知夢だったのだ。今日はいつもより慎重に運転しなくてはならなかったのだ」とひどく落ち込んだ。
そりゃあそうだ 2 日続けて夢だったって事はないわナア…と諦めた途端、目が覚めた。
「今日も助かったア～」と2日続きの幸運（？）に胸を撫で下ろしながら「もう3度目は無いぞ」とあらためて自分に言い聞かせた。

HITOKOMART
P 226～

松岡　園子

母から電話。「スマホで@って、どうやって出すの？」と切羽詰まった声。画面を見ないで教えるのは難しい。「キーボードを英

語にして…」と言うと、「え、スマホに英語しゃべるの？」と返ってきて、思わず笑った。ようやく「できた！」という声に、私もホッとする。こういうやりとり、ちょっと面倒で、でもなんだかうれしい。

統合失調症を患う母と
ともに生きる子ども
P208～

サトウタツヤ

帰って来た＿対人援助学縦横無尽、今回から年 2 回の投稿にしました。海外からのゲストの活動、学会、総合心理学部の交流活動、ゼミ、その他の活動の備忘録みたいなものです。2025 年 4 月から、学校法人立命館副総長（研究・入試・DEI）に就任しましたがナカナカ大変です。

母校である東京都立大学の集中講義は、その一週間前に咳などで体調を崩してしまってほぼ出たとこ勝負でやりましたが（コロナ検査は受けていきました）、少人数だったこともあり、そこそこうまくいったような気がします。録音録画もありますが、全く聞く気にはなれないし、ましてや文字化などしたくない。ライブからライブ盤を作るようなことは今の私にはできません。

帰って来た＿対人援助学縦横無尽
P 76

脇野　千恵

8月初め、研修を兼ねて沖縄に行った。沖縄の方が涼しいと、友人たちは大騒ぎ。日差しは強いが、確かに風は湿気もなく爽やかだった。沖縄と一口に言っても、南北に長く多くの島々の集まりだ。島めぐりが好きなので色々と旅しているが、数年前には最西端の島、与那国にも訪れたことがある。隣の国台湾をすぐ近くに眺望できる島だ。歴史を聞くと、昔から中国大陸との物流が盛んであったとのことだ。

沖縄本島の那覇市街は最近、目覚ましく発展している。高級ホテル、ショッピングモールがあちこちに。高層マンションも立ち並び、ここは外国かと思わせる風景が広がっている。インバウンドで外国人観光客も多い。

今回は、丸木夫妻による「沖縄戦の図」の展示を観たいと、久しぶりに宜野湾市にある「佐喜眞美術館」を訪れた。美術館の隣は、アメリカ軍の普天間飛行場。フェンスの向こう側には、元住人の立派なお墓がみえる。住民の墓参は許可されていると聞く。帰り際、たまたま館長の佐喜眞道夫さんから話を聞くことができた。

丸木さんが当時、沖縄戦体験者から実際に話を聞きながら描いた様子などを知ることができた。今も続く基地との共存。館の展望台への階段は、沖縄戦終結の日6月 23 日に併せて、6 段と 23 段の作りになっている。その先には、基地と広い海が広がっていた。

こころ日記「ぼちぼち」
P 232～

岡崎　正明

参院選が終わり、その結果がなかなかに話題になっている。

「〇〇ファースト」とか「外国人問題」というワードがなんだか急にクローズアップされたが、別に新しくてやれないようなものではなく。「〇〇ファースト」なんか 1 期目のトランプ政権の頃からだし、「外国人問題」も、歴史をみれば幾度となく人の世は、不満や怒りのぶつけどころを、少数の未知の相手を対象にしがちという、「あるある」話だ。

以前からツッコみたかったのだが、「自国第一主義」なんて新しい風のネーミングで盛り上がっているが、いつの時代もアメリカに限らず、すべての国は「自国第一」でやってきたじゃないか。植民地時代も、朝貢貿易も大航海時代も古代文明の頃も。当たり前だ。みんな国益と自国民が大切。それがはるか昔からの国際社会だ。だから今のは「自国第一主義」ではなく、正しくは「今さえよければいい主義」。格好良く言わせてあげるなら「刹那第一主義」だと思う。温暖化も、関税も、効率化省も、とにかく即結果が出る＝すぐに得することがすべて！未来の世界のことは言うに及ばず、なんならアメリカの子や孫世代のことなんて知らん！それが正しい表現じゃないだろうか。

昔読んだマンガで、南の島のリゾート開発に賛成反対で地元が揉める話があって。主人公が「簡単な話です。この島にあるものを 100 年で使い切るか、1 万年かけて使うか。それだけのことです」という場面が印象に残っている。別に先人が偉かったのではなく、ただ 100 年で使い切る方法を知らなかっただけかもしれないが、生き物の生存戦略としてどっちが良いかは考えた方がいい気がする。生きてる意味なんか分からないけど、とりあえず命を次につなぐことを続けてきたのが、私たちである。

ヒトは使う道具の変化と共に生活や思考を変化させてきたと言うが、インターネットやスマホがほぼ人類にいき渡ってきて、いよいよ大変化の波がやってきたのだろうか。すぐに答え（結果）が出る道具を得た我々は、視力だけでなく思考も近視眼になってしまった。進化の袋小路でなければいいが。

役場の対人援助論
P 104～

千葉　晃央

社会福祉の分野では自然環境との循環も含めて、支援を考えることが必要とされている。10 数年前、屋久島で当時対人援助学マガジンで連載をしていたネイチャーガイドの大野睦氏（ネイティブビジョン｜屋久島縄文杉ツアー・白谷雲水峡ガイド｜世界遺産エコツアー専門会社）のウミガメ保護活動に同行させてもらった。バケツいっぱいの子ガメがかわいかった。ハワイのハナウマ湾ではパンデミックを期にウミガメも暮らす自然環境を残すために大幅な整備回収が行われた。入場料を取り、入場前にサンゴや魚など生き物に触らない、エサをあげない、ハナウマ湾の希少性など環境教育を受けて、初めて入ることができる。ビーチでは海水浴、シュノーケリングなどが楽しまれていた。実際にウミガメと泳ぐこともでき、パンデミックの影響がなくなった現在、整備後初のピークが 2025 年夏にあったようだ。そのため駐車場は満車。そもそも、たどり着くのも渋滞で、空港の周辺も大渋滞。「観光関連従事者の多

忙」が地元のトップニュースであった。ハワイの産業構造は、軍事基地関連がトップで次に観光で、大きく離れて農業。関西よりは下手すると 10 度も涼しく、湿度も低く「南国のハワイ」は今や「避暑地」である。単純なことは言えないが、赤道直下に比べると、日本の酷暑の背景を考えてしまう。何を優先すべきか、発展なのか、環境なのかなどもよぎる。こうした異常気象による大きな影響は結局苦しい人々にさらに重ねられる、と思った 2025 年夏。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P 16～

見野　大介

今年の夏は格別暑く、窯の部屋は窯の放熱もあって室温45℃くらいに。急ぎの時なんかは、窯の中が80℃くらいの状況で上半身を突っ込み入れ、焼きたてホヤホヤの器たちを取り出す。それが終わると、次に焼く器たちをまた設置して焼成開始の繰り返し。サウナ要らずな日々。早く秋になってほしい。

ハチドリの器
P4

柳　たかを

マンガ「蜘蛛の糸」(原作・芥川龍之介漫画・柳たかを)は、今回の第 4 話で終わります。この作品は 2004 年頃に自分のネットサイトに掲載したものでした。

描きながら自分の仙術に思い上がった孫悟空が、お釈迦様の手の平から結局飛び出せなかったという話を思い出してました。

当時は、東京に活動拠点を借りており、あれこれ模索していた時期です。

すると昔大阪でマンガ編集でお世話になった先生から「宝塚の大学(芸大)でマンガコースを作ることになったんだが、手伝ってくれない？」と声をかけていただき、迷いましたが、お受けしました。そのとき 50 代半ばでもあり、「これは貴重なチャンスかも」と思い直したのです。

そこから 10 年間、宝塚造形芸術大学(現・宝塚大学)にお世話になりました。

さて、次号からは新作に挑戦して行こうと思います。一応、原作のある話を少しアレンジした作品をと計画しています、、、また次回作でお会いできれば幸いです。

蜘蛛の糸
P 142～

荒木　晃子

これが HP に UP される頃には、10 月開催の対人援助学会第 17 回年次大会まで一カ月を切っている筈だ。大会実行委員としてはたいしてお役に立たずじまい。今も大会長にはご負担をおかけしたままである(反省しきり)。代わりに大会初日、いの一番に開催予定の理事会企画のコーディネター、また進行役としては、しっかり力を注ぐつもりで準備している(のでお許しを・・)。 さて、今年の猛暑は規格外の暑さで、8 月も終わりというのに連日体力の消耗が著しい。ぐったりしているのは愛犬も同じで、何度、人間の病院と動物病院へ駆け込もうとしたことか。自分の体調を維持するのも、2 匹の愛犬の健康を維持するのも大変だが背に腹は代えられない。電気代を気にしつつ外出時を含め 24 時間エアコンを消すことなく無事に夏を越せそうである(来月の請求金額が怖い)。

今一番の課題は、法学系学術誌に分担執筆の依頼を受けた論文締め切りが9月末なので、そろそろ暑さでのぼせた頭脳を目覚めさせなければならないことだ。原稿にはぼちぼち手を付けていたのだが、思い切って本気モードに切り替えなければ。今年度はこの勢いで走り抜ける予定である(途中でへばりそうな予感も)。

生殖医療と家族援助
P 91～

古川　秀明

この夏、般若心経に導かれるように、奈良と和歌山の県境にあるパワースポット『玉置神社』を訪れました。訪れた人々が口を揃えて『何か不思議な体験をした』と語るのを聞き、その言葉に引き寄せられるように、私も期待に胸を膨らませながら足を運びました。

実際に訪れたことがある人ならお分かりでしょうが、この地への道のりは、思わず息を呑むような険しい交通の難所が続きます。そして私の不思議体験はデジャビュでした。神社の奥に静かに佇む池、その姿を夢の中で見ていた記憶が鮮明に蘇りました。この体験が何か特別な意味を持つのか、それともただの思い込みなのか、確証はありません。しかし、その感覚の不思議さだけは、心に深く刻まれています。

講演＆ライヴな日々
P114～

原田　希

猛暑という言葉にもう飽き飽きですね！北海道も 35 度を超え、牛さん危うし！どうなることか…の日が続きました。牛舎のファンの台数を増やして霧吹きをつけて、餌は栄養価の高い食べやすいものを、少しでも涼しい早朝から食べられるように準備。やれるだけのことはぜんぶやって、あとは応援するしかない。私たちができることが少なくてがっかりした夏でしたが、牛さんたち持ち堪えてくれました！熱中症予防、炎天下の外出や運動直後に一杯の牛乳が良いとの話もあります。牛さんには助けてもらってばかりですね。

原田牧場Note
P212～

野中　浩一

この夏は初体験と久しぶりの体験がたくさんありました。

子どもの帰省を家で迎える経験、輪島での訪問支援ボランティア、関東にいる中学時代の友人達との飲み会、高校時代の友人達との旅行。

仕事を離れてみて、寄る辺ない気持ちもあり、色々な人に会うことが増え、なんだかんだでやることはなくならないものだと、有り難く思う今日この頃です。

coconollp@gmail.com

島根の中山間地から
Work as Life
P243～

西川　友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。そして嬉しいことに、本文にも書きましたが、昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぼちぼちと出てきました。

この対人援助学マガジン 62 号が出るころには、対人援助学会第 17 回年次大会の参加申し込みが迫っています。西川も実行委員として活動しています。この原稿を書いている 2025 年夏現在、実行委員会のメンバーははあっちへこっちへ声をかけ、みながそれぞれ自分の出来ることを頑張っている真っ最中。今年は「地に足付けて、皆と生きる。」をテーマに、土地と地域の人々の力をぎゅっと感じる内容で企画しております。どうぞ皆さんお楽しみに。お申込み待ってます。最寄り駅は JR 天王寺とか地下鉄阿倍野とか、基本的にアクセスいいですよ。あべのハルカスも近いし。ぜひいらして下さい。会場でお会いしましょう！

福祉系対人援助職養成の
現場から
P67～

山口　洋典

2025 年、50 歳になって人生で初めてアフリカ大陸に足を運びました。8 月 13 日から 15 日まで、南アフリカのダーバンというまちで開催された国際サービスラーニング・地域貢献学会（IARSLCE）の年次大会に参加し、令和 6 年能登半島地震での学生ボランティアの活動記録の分析と、日本サービス・ラーニングネットワークによる活動を共同で発表して参りました。ダーバンは南アフリカの中でもヨハネスブルグの次に人口が多く、港町としてインドとのつながりが深いことも重なって、インド系の南アフリカ人が 4 分の 1 程度を占めると言います。そのため、魚介類が豊富に入ったダーバンカレーで、到着初日に味わうことができました。

今回、初の南アフリカに訪問で小さなカルチャーショックを受けました。それは日本サービスラーニングネットワークの活動を共同で発表した際、具体的にはアメリカのメリーランド大学で長くサービス・ラーニングの教育・研究を牽引されたバーバラ・ジャコビー先生の著作を翻訳するプロジェクトを報告した際、ある南アフリカの大学の先生から「なぜ翻訳することにしたのか」と問われたからです。言い換えれば「日本には日本に合った実践の仕方があるだろうから、それを追求していけばいいのではないか」という問いでした。発表の後、共同発表者たちと、南アフリカの方々が「自文化への誇りを持っていること」を確認したと共に、折しも国政選挙を経て排外主義などが話題となっていたことも重なって、果たして私たちはどれだけ自文化への誇りを持てているかについて日本から 23,000km 離れた地で語り合いました。

ＰＢＬの風と土
P173～

來須　真紀

今年の夏は、こどもたちの推し活をしました。長女は部活で中国大会に出場。長男も人生初の遠征を経験。次女もソフトボールを始める。という超ハードな推し活。日焼けが気になお年頃の母ですが、わが子の推し活ができるのは、元気な体と推し活しても嫌がらず付き合わせてくれる子どもたちのおかげです。せっかく夢中になれるものを見つけることができたわが子たち。これから夢中力をつけていってほしいと思っています。

教室の窓から
P276～

寺田　弘志

くすぐったがりの患者さんがいらっしゃいます。
触られるのに抵抗のある患者さんに施術させていただくヒント、数値化、無症状の問題、ベルトやテープを使った施術・・・
そんな材料を使って、今回も本文では、パラドキシカルストレッチング＆パラドキシカルコントラクティングを説明していきます。

接骨院に心理学を入れて
P179～

鵜野　祐介

我が家の畑のミニトマトがこの夏は大豊作でした。6株しか植えていないのに、毎日 30 個ぐらいが2～3週間収穫できて、家族2人では食べきれないほどでした。大自然の恵みに感謝です！

うたとかたりの対人援助学
P165～

団　遊

みんなが、みんなを、みる会社
休載